



お寺には山号・院号・寺号があります。

雲洞庵は、金城山（1369メートル）の山麓にある禅寺で、山号が「金城山」、寺号が「雲洞庵」、「金城山雲洞庵」が、正式な名称です。

現在の宗派は曹洞宗。

越後曹洞宗、四大禅寺のひとつに数えられています。

ガイドをすると、お客様によく聞かれました。

「こんなに立派な格式があり、大きなお寺なのに、どうして『寺』ではなくて『庵』なのですか？」

そうですね。では、その理由からお話します。

千年以上の昔々、南魚沼市の一部は藤原家の荘園でした。

「金城」「雲洞」の名は、その時代に高貴な方が名づけたと言われています。

雲洞庵の創建は古く、養老元年 717 年。

今から 1300 年程前、藤原鎌足の孫、藤原房前公が母親の菩提を弔う尼僧院として建てられたお寺です。スポンサーが、時の権力者「藤原家」ということで、たいそう栄えたお寺です。

言い伝えによりますと、昔、ある集落に山田治郎右エ門という人がおりました。

ある年の事、治郎右エ門の家の年寄りが、熱病にかかり苦しんでいた時、一人の尼さんが、お経を唱えながら托鉢に参りました。その声が、まるで銀の鈴を振るような美しさでしたのできっと尊いお方である

うと、治郎右エ門は家に招き入れ、病魔退散の祈禱をしてもらいました。
すると、なんということでしょう。不思議な事にお年寄りの病気が治ったのです。

その徳に感じ入って治郎右エ門は、尼僧に頼んで集落の草庵に留まってもらいました。
この尼さんこそ、藤原房前の母だったのです。

尼さんは、金城山からコンコンと湧く清水で、病人を看病したり薬草の知識を教えながら、貧しい村人達を助けました。

だからでしょうか？

尼寺だった当時の御本尊様は薬師如来でした。

1300年、経った現在も、雲洞庵の瑠璃光殿には美しい御姿のまま安置されています。

左側に日光菩薩像、真中に薬師如来像、右側に月光菩薩像、下列には十二神将が守っておられます。

きっと、その当時から人々の信仰を集めてきたのでしょう。

尼さんが亡くなり、後に、母を慕ってこの地を訪ねた藤原房前はある日、近くの山に登り、雲のかかる頂上の洞穴で一夜を明かしました。

その翌朝、洞窟から日が昇るにつれて変わりゆく四方の景色を眺めていると、朝日が岩角に反射して輝く光景が「黄金の城」の様に美しく見えました。

房前は、この山を「金城山」と名付け、村人達は、その麓の集落を雲洞と呼ぶようになりました。

これが雲洞庵の名前の由来です。

歴史は、川の流れのように幾度も流れが変わるのが常。

その後、栄華を極めた藤原家の時代が終わるとともに、「日本一の庵寺」と言われた雲洞庵は次第に衰微していきました。

600年後・・・

関東管領上杉憲実公の登場にて雲洞庵は再興されます。

越後一の寺の異名を誇り「雲洞庵の土踏んだか」という言葉が生まれるのです。

その続きは後ほど・・・